



夢だった日高山脈国立公園化

2020年8月、日高山脈が国立公園化されるというニュースが流れた。「日高山脈襟裳国定公園の国立公園化に向け、環境省は国立公園の指定を3年後の2023年8月ごろをめどに作業を進めていることが分かった。パブリックコメントを通して環境省案を完成させ、審議会に諮問し、官報告示で国立公園の指定となる」（日高報知新聞 2020年8月15日記事より）。

日高山脈の国立公園化は、私の夢だったが、記事を読んだとき、喜ぶよりも不安の方が大きくなった。それは日高山脈国立公園化を北海道庁が阻んできた歴史があり、とくに日高側においては国立公園化に関して自治体や住民の機運が高まっているともいえず、2016年の水害で傷ついた日高・十勝双方の登山道に至る林道が未だに復旧していない状況だったからである。

私の思いとは裏腹に、日高山脈の国立公園化への作業は進んでいき、2024年夏には、日本最大面積となる山岳と海洋の国立公園が誕生する。

*

「初心忘るべからず」。私が事務局長を務める日高山脈ファンクラブ設立

当時（2000年）の私の想いをここに書き記し、今後の活動の糧としていきたい。

山との出会いと北海道移住
日高山脈ファンクラブの設立

私は埼玉県で生まれ育ち、子どもの頃から山に親しみ、高校ではワンダーフォーゲル部、大学では探険部に所属して日本各地の自然環境に親しんできた。大学卒業後に北海道の農山村で働きたいと思って来道し、札幌で就職浪人生活を送ったが、縁あつて1994年に旧日高町に就職した。

日高山脈の懷で暮らし始めると、日高山脈が置かれている現状を目の当たりにするようになった。麓の町は、開拓期以降、原生林伐採による林業振興、電源開発、道路建設によつて発展したが、近年は林業資源の枯渇により林業が衰退し、急激な人口減少が続いているにもかかわらず、公共的な開発事業が続いていることに気づかされた。一方、国定公園としては日本最大規模を誇っているが、自然の優位性を考えると国定公園レベルの管理でいいのか考えさせられた。

下記は、30歳当時の私が感じた想いを2001年の北海道自然保護協会誌『北海道の自然』39号に寄稿



七ツ沼カール

した文章「日高山脈の魅力とファンクラブの活動」の一部である。現在に通じる問題が含まれているので、国立公園化にあたって、ここに転記する。

日高地方を含め北海道が観光立県として「雄大な自然環境」を売りにして国内外から観光客を誘致しているが、果たして山麓に住む者が日高山脈の自然に魅力を感じ、原始性を残したいと思っているのか？住民の意識が開発一辺倒から変化しているとは思えない。それは山村の生活が開発事業に依存していることが一因と考えられるからだ。山村の生活基盤として自然

と共存しながら成り立つ産業（生業）を育てていかない限り、開発問題は解決しないと考える。日高山脈の自然を次世代に引き継いでいくためには、住民も登山者も研究者も「市民」という共通の立場で学習し、体験し、行動していくことが必要だ。その中から自然と共存できる産業や生活を考えてい



きたいと思い、日高山脈ファンクラブを立ち上げた。

近年まで日本の残された秘境と呼ばれていた日高山脈は奥地まで開発が進み、さらに全国的な百名山ブームなどにより登山者が急増し高山植物の盗掘や登山者の排泄が問題視されるようになってきた。さらに、この日高山脈をどう次世代に伝えていくの

か、日高山脈の山懷に住み、山脈を愛する者として考え行動する必要性を痛感している。そこで「日高山脈を愛するあらゆる人びとがみずから発想し、ともに学びあい行動する市民団体としてファンクラブを設立しよう」と、北海道の山メーリングリストや新聞を通じて呼びかけ、2000年5月27日に18名の賛同者を得て設立総会を開催し発足した。単なる開発に対する反対運動で

はなく、「日高山脈をどう次世代に引き継ぐのか」ということを会員がともに体験し、考え、学び、行動するなかから答えを見つけ出せるような活動をしていきたいと考えている。日高山脈を共有する十勝・日高の住民がもっと関心を持つて欲しいが、急がずだんだんと広げていければと思う。行政に依存することなく「市民」としてできることは何か、住民、登山者、研究者が手を組んで活動していこう。まだ出来たての若いクラブ。みなさんもいっしょに活動しよう。

二十数年前に私はこのように記していた。

2006年、国立公園化に向け講演会・スライド上映を開催

2006年5月13日、「日高町」の道の駅を会場に日高山脈ファンクラブの主催で、日高山脈の国立公園化を目指す講演会&スライド上映会「日高山脈の魅力と国立公園化の可能性」を開催した。2006年1月に、北海道自然保護協会が環境省に国立公園指定の要望書を提出したのがきっかけだった。案内文には、このように記していた。

「現在、日高山脈の主要部は10万3千鈔にもおよぶ日本最大面積



国立公園化の実現を目指す
日高山脈の国立公園化を目指す初のフォーラムが、日高町で開かれた。主催した「日高山脈ファンクラブ」事務局の高橋健さん（左）は、日高山脈に生息するナキウサギなどの動物は世界的にも貴重と保護を訴える。ナーの向上を訴えてきた「地元の意識を高め、指定を求めたい」と意欲を燃やす。日高町

の国立公園に指定されている。環境省によると、『国立公園は日本を代表する、特にすばらしい自然の風景地を有する地域に對し、国立公園は国立公園には及ばない各地方を代表する美しい自然を有する地域で、面積は一般的に国立公園の方が大きい。公園管理は、国立公園では環境省職員が、国立公園では各都道府県の職員が行う。』としている。果たして日高山脈は、このとおり国立公園に及ばない自然環境なのか？国立公園は国が管理整備し、周辺自治体には環境省の自然保護官事務所が設置される。知名度は国立公園のほうが断然高く、現在以上の自然保護体制と経済効果が見込まれる。し

北海道新聞 2006年5月22日付▶

かし指定は地元の要望が欠かせない」講演会&スライド上映会では、北海道自然保護協会前会長で専修大学北海道短期大学名誉教授の俵浩三さんが「日高山脈と夕張山地・国立公園としての可能性」を、北海学園大学教授の佐藤謙さんが「日高山脈と夕張山地の植生」を、北海道大学総合博物館資料部研究員の在田一則さんが「日高山脈と夕張山地の生い立ち」をお話しくださり、植物写真家の梅沢俊さんが日高山脈の花の魅力について、スライドを上映しながら語られた（肩書き・役職はいずれも当時）。

意見交換では、国立公園化の利点や今後の運動方針についての議論が交わされ、地質構造や生態系が日高山脈と深くかわりのある夕張山地を共に国立公園化すべきという提案があり、日高山脈ファンクラブとユウパリコザクラブの会が中心となって、道内の山岳団体や自然愛好団体に呼びかけて運動を進めていくこととなったが、国立公園管理者の北海道庁の協力が得られず、結局、国立公園化の運動は下火となっていた。

そして今…

2024年3月9日に行われた第25回山のトイレフォーラム「どうする！どうなる？日高山脈国立公園

化」のパネルディスカッションに、私は日高山脈ファンクラブ事務局長として、日本山岳会北海道支部前支部長の藤木さんとともに登壇した。そこで述べた私の意見は「野営地指定」「トイレ整備」「焚き火禁止」の3点。①日高稜線に野営指定地を設定せよ野営地は登山計画に基づいて宿泊する場所であり、緊急避難的であるビバークのことを論議する必要はない。日高山脈国立公園指定書に野営指定地の記載はなかった。現行の国立公園下では野営指定地が無いので、登山者の増加と共に、高山植物を踏みつけ、石を除去し、整地して、野営地が勝手に造成されている。そういった場所にはトイレ跡が少なからずある。ある意味「無法地帯」と化している。

法令に定めは無いようなので、日高ルールとして稜線上や樹林帯では、植生への負荷を最小限とした上で、水場無し、小規模分散型の野営指定地を定め、排泄行為は携帯トイレ利用を必須とする。またいくつかの小規模野営指定地の中間やカールなどを利用した野営指定地に携帯トイレブース設置を要望したい。

②登山口トイレ設置と山中での携帯トイレ利用推進

日高山脈国立公園指定書に「携帯トイレを使おう」的な文言はあつ

たが、その器に関する文言は一切無かった。日高山脈主峰の幌尻岳の登山者の多くは道外からの登山者である。その登山者に「使用後の携帯トイレを家に持ち帰れ！」ということは非現実的である。大雪山国立公園では、登山口やその近くにトイレが、主要登山口には携帯トイレ回収ボックスがあり、登山道には携帯トイレブースが設置されている。同じ山岳国立公園となる日高山脈国立公園でも、登山口へのトイレと携帯トイレ回収ボックスの設置、登山道上の携帯トイレブースの設置を要望したい。携帯トイレブースの管理は、地元自治体や地域山岳会に加え、広く登山愛好者の手で運営していければと思う。

③焚き火禁止キャンペーンをしよう

日高山脈というと、焚き火というキーワードが出てくる。焚き火容認派がよく言うのは、ヒグマ対策であるということである。七ツ沼カールではハイマツを燃やした焚き火跡が散見される。日高山脈は今も国立公園に指定されていて国立公園と同様の自然保護法によって人間行為が規制



されている。ヒグマが多く出没するなら、その山域での登山行為を止めればよい。山は人間だけのものじゃない。自然環境あつての登山！「日高＝焚き火」は、もうやめませんか？

フォーラムで藤木前支部長が日高の魅力として、人工物が見えないこと言われていた。その自然を後世に残していくことも公益社団法人としての日本山岳会の責務の一つだと思う。

（日本山岳会北海道支部役員・日高町在住）

*写真はすべて筆者＝高橋健撮影

ハイマツを伐って燃やした七ツ沼カール焚き火跡▶

